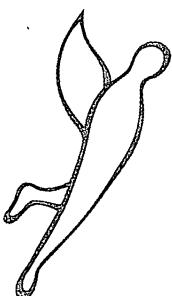


チベットの宗教や文化は、しばしば死のイメージと結びついている。しかし、それは単なる死ではなく、自己あるいは他者の救済へと至るためのなかだらとしての死である。

チベットの奇習のように紹介される鳥葬は、死体を解体して鳥に食べさせるという、世界でも他に類を見ない葬送の方法である。すでに魂の抜けた死者の身体を、鳥類に布施として与えるという仏教的な解説が与えられているが、鳥を介して死者の魂を天へと送ると説明されることもある。もつとも、実際は火葬のための薪が入手しがたいという地理的な条件の中で始められたともいわれ、高僧や裕福な家のものは火葬されることが多い。また、鳥葬や火葬の他に土葬、水葬、風葬の習慣もある。

ダライラマやパンチエンラマに代表されるいわゆる「活仏制度」も、死と救済を前提としたシステムである。観音菩薩などの仏たちが、われわれ生類を救済するため、高僧の姿をとつて何度も生まれ変わる。「活仏」に相当するチベット語は「トゥルク」で、仏が現実の世界に出現するための「転生者」を意味する。このような高僧が亡くなるとあらたな転生者探しはじまり、そのために託宣、占い、予言、夢、瑞兆の検証などさまざまな方法が動員される。

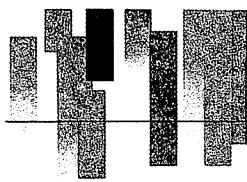
いわゆる「チベットの死者の書」も、このようなチベットと死というコンテキストでしばしば取り上げられる。「死者の書」というタイトルは、死後の世界での魂



「見ること」による救済 —チベットの死生観—

「チベット死者の書」の全体をつらぬいているのは、死者の視覚体験である。「死の瞬間の中にある」でまばゆい光明が現れ、仏たちがつぎつぎと死者の前に登場する。

森 雅秀 金沢大学文学部助教授



の遍歴をイメージさせるが、実際は死者の救済を説く經典で、本来の名称は「バルド・トエドル」（中有における聴聞による解脱）という。輪廻転生の中で死者が次の生をうけるまでの中間状態を表す「中有」（日本では「中陰」ともいう）のあいだに、この經典を僧侶が唱え

ることで、死者が再生をまぬかれ、仏の世界に生まれることを願う。一般に七週間すなわち四九日というのがこの中の有の期間と考えられ、そのあいだに仏の救済にあずかることがこの書の主題である。輪廻思想ではすべての生類は天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六つの世界（六道）を無限に生まれ変わっている。仏教における悟りや救済は、このような輪廻という苦難の大海上からの脱出であり、これを解脱という。

「チベットの死者の書」は付属の願文をのぞくと、全体が三つの部分からなる。これは、中有の期間全体を、死の直後の「死の瞬間の中有」と、はじめの一週間の「存在そのものの中有」、そして最後の五週間に相当する「再生の中有」の三つに区切り、それぞれの期間に死者の眼前に展開される光景や、解脱の方法が説かれるためである。はじめの部分は「死の瞬間の中有における光明のお導き」とも呼ばれ、死の直後にあらわれる光明を手がかりに、仏と一緒に化して解脱する方法が示される。ヨーガの瞑想にたけた者や善業をつんだ者などのための解脱の方法として紹介される。第二の「存在そのものの中有」においては、柔軟な姿をした四二の仏たちと、恐ろしい形相の五八の神々がつぎつぎとあらわれ、輪廻からの脱却をいざなう。ここは「死者の書」の中心的な部分で、大日如来などの仏が眷族をひきつれて光明とともに登場するドラマチックな光景がくりひろげられる。最後の「再生の中有」では、これまでの方方法でも解脱がかなわなかつたものたちのために、再生への入胎を避ける方

法と、さらにそれにも失敗した場合、六道の中の上位の世界に生まれ変わるための手段が示される。

「チベットの死者の書」の全体をつらぬいているのは、死者の視覚体験である。「死の瞬間の中有」ではまばゆい光明が現れ、「存在そのものの中有」では強烈な光をともなって、仏たちがつぎつぎと死者の前に登場する。「再生の中有」でも具体的なイメージを手がかりに、再生や悪い生まれ変わりを避ける方法が示される。また、死者が見るという幻影が随所で説かれ、これを実体のないものと知ることで救済されることが強調される。

五感の中とくに視覚を重視するのは、「死者の書」の中核をなす「存在そのものの中有」でとくに顕著である。そこではさまざまな仏が死者の現前に現れるが、彼らはあまりにまばゆい光明を放っているため、死者はひるんでしまう。その時、弱々しいが魅惑的な光が別の方角からさしかかるため、それにひきつけられると、天や人などの六道へと至り、ふたたび輪廻の中に引き戻されることになる。強烈な仏の光を受け入れることができきた者のみが、その仏によつて救済されるのだ。

わが国でも平安時代後期にさかんとなつた浄土信仰では、同じように「見ること」を強調する。平安貴族や僧侶たちは、死に臨んでは極楽への往生を願い、阿弥陀の来迎をひたすら念じた。「臨終行儀」と呼ばれる死を迎える儀礼では、死にゆく者の周囲にはともに往生を願う人々が集まり、さらにそこには阿弥陀が来迎する様子を

描いた仏画や彫像も置かれる。阿弥陀の来迎を見ることは、死にゆく者ばかりではなく、まわりの人たちとも共通する願いであった。そして、当時の文献や絵巻は、来迎の視覚体験が、実際にこれらの人々によつて、しばしば共有されたことも伝えている。死者の枕辺に置かれた来迎図や阿弥陀像は、彼らの視覚体験のモデルとなるイメージなのである。浄土信仰の実践の基本である念佛は、鎌倉時代以降、阿弥陀の名号を唱えることが強調されるが、本来、仏を念じることは見仏や観仏という「仏を見

洋泉社の新書y
好評発売中

新書y021

キーワードでわかる 最新・心理学

成田毅 [編]

心理学が事件の鍵になる。ニュースになつた言葉で心理学がわかる
理解しがたい少年犯罪、カルト事件。そこで活躍する、わかつたようでもわ
からない「言葉」の数々。いたずらに消費される心理学用語には、しかし、
社会や文化、事件の底に潜む人のこころのありようを解き明かすヒントが
ある。用語解説と現実の出来事をリンクさせ、迷宮化した現代ニッポンを
読み解く【こここのキーワード辞典】！



新書y010

なぜ人を殺しては いけないのか

8万部突破

小浜逸郎（新しい倫理学のために）

今なぜ「汝、殺すなれ」という掟は機能しない
か？人倫のタガが緩んだ退屈と空虚と焦燥の
時代に、古くて新しい永遠の課題を具体的な状況
との接点から考える。

● 定価（本体680円+税）ISBN4-89060-1503-8

● 定価（本体680円+税）ISBN4-89060-147-4-0

洋泉社

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8
TEL 03-5259-0251 Fax 03-5259-0254
<http://www.yosensha.co.jp>

ること」であった。「見ること」による救済は、けつし
て遠いチベットのことだけではない。
チベットの仏画を見ると、一般的日本人は毒々しいま
での鮮やかな色づかいに驚かされる。しかし、それを生
み出したチベットでは、日常生活における視覚体験はき
わめて限定的で素朴なものであつたであろう。たとえ画
像であつても彼らにとつて仏を見ることは、非日常的な
強烈な体験であつた。照明設備や映像機器などに囲まれ

て、つねに視覚を刺激されることで逆に麻痺してしまつ
たわれわれは、むしろ貧弱な視覚体験しかできないのか
かもしれない。特別なものや非日常的なものを見る「こと」は、
本来、人間の根幹にかかるもつと切実なものだつたは
ずだ。それは平安時代の日本人でも同じである。「チベ
ットの死者の書」の中で死者の前でくりひろげられる光
景は、「見ること」がそのまま死者の救いであることを
われわれに強く印象づける。

Masahide Mori
1962年、滋賀県生まれ。
名古屋大学文学部卒。
名古屋大学大学院博士課程
中退。
専門はインド・チベットの
密教文化と图像学。
共著書に『曼荼羅と輪廻』
(佼成出版社)、『マンダラ宇
宙論』(法藏館)など。

PSIKO特製バインダー注文受付中

誌PSIKOの12冊整理保存用の特製バインダーが出来ます。一年分余裕をもって挟み込みます。開きが良く、読むにもコピーにも便です。どうぞ御利用下さい。

特色クリーム色、PSIKO題字金箔押
予価1000円(税、送料別)部数限定

次号予告 2003年4月号 4月10日発売

特集 意識の研究

After-Word

編集後記

Publisher & Editor

Masahiko Shimura

Managing Editor

Ryuka Nakano

General Dpt.

Masumi Takatsuka

PSIKO 2003年3月号

2003年3月10日発行

年賀めぐみ読書料9,600円(税込み1冊800円)

編集兼発行人／志村昌彦

発行所／株式会社冬樹社

〒162-0041東京都新宿区

早稻田・鶴巣町556ラフィネ早稲田203

TEL03-5292-1281 FAX03-5292-1280

E-mail web@tohjusha.co.jp

http://www.tohjusha.co.jp

Printed in Japan 2003©

*本誌は以下の各書店の店頭で手にとることができます。(順不同)

(東京周辺) 日本橋・丸善、東京・八重洲ブックセンター、御茶ノ水・丸善、津田沼・丸善、神保町・書泉グランデ、三省堂書店、渋谷・三省堂書店、新宿・紀伊國屋書店(本店・南吉)、池袋・ジュンク堂書店、東京旭屋書店、黄浜・有隣堂(ルミネ店)

(地方) 丸善=札幌(南一条店)、仙台(アエル店)、名古屋(栄店)、岡山(表町店)、福岡(福岡ビル店)、旭屋書店=大阪(本店)

*紀伊國屋書店、ジュンク堂書店の全国各店にて本誌ブシコの、お取りよせがパックナンバーを含めて可能になりました。どうぞ御利用下さい。

■法律で定められた場合を除き、
許可なく本誌からの複製、転載を禁じます。

死を意識するようになるのは、世代の友人が病氣で亡くなったとの報せに接する機会が増えてきてからだと感じています。学生時代にも事故で亡くなつた友人はいましたが、自分の世代で病氣で死ぬ友人が増えると、さすがに考えないわけにはいきません。旧友と杯を傾けても「お互い身体は大事にしよう」と酒量も控えめになります。死について考へることは、最近ではタブーではなくなりつあります。考えてみれば、人は意を問われることがなく生まれ、そして死んでいきます。皆がいざれは死を迎えるが、死についての捉え方はさまざまです。ただ、死を迎える人もそれを見届けれる人も、何かを考えることは必要なではないでしょうか。この特集がないでしょか。この特集がその一助になれば、と思います。

(志村)

死には、他人の死と自分の死があります。他人の死は突然訪れ、計報に接したとき、否応なく時間の外、空間の外に投げ出される。悲嘆から徐々に回復し、死者を想い、やがて忘れる。他人の死をめぐっては、その周辺の圈域のこととを体験として語ることが出来る。だが、自分の死を語ることは不可能である。その時、何が起るのか、その先はどうへ行くのか、あるいは帰るのか。語る主体がその瞬間、消え去るからだ。古来より人間は、死とその後の在りようを何とか説明しようとしてきた。もちろん、どれも現実ではない。何しろ語る人間は生きているからだ。だが、現実ではないことをもつして、捨象するのは愚であろう。

私たち生き、そして必ず死に行く存在である。死を想うこと、それは生を考へることでもある。(成田)歩ませていたいただきたいものと考へております。

さて今号は死生学サナトロジー。時間の捉え方に根源的な向きが生まれるのでじょう。私などは遙かなるもの、悠久なるものを渴仰して止まらず、至福をもとめながら生の悲哀、死の恐怖を思ひます。そういうとき愚問、父母未生以前の己を問うことを求められたことを思い出します。

(中野)

能面に「瘦男」というのがある。死相を表している幽霊の面だ。以前「瘦男」の面を手にした時、暗く冷たい所から何かをこちらに乞うてゐるような表情に、つい見入ってしまつたことがある。能面特有的象徴的な表現を保つた出来なのに、妙にリアルなのだ。全然似てないと感じつつ、祖父が亡くなつた時にそつくりに見える、その不思議。その能面の作家は「昔は死人を身近に見たんだろうね。瘦男には先人が死人を見ながら何か他の面とは違う思い入れをして打つたんじやないか、つていつも思うね」と話した。

鈴木慶雲という能面作家は、瘦男系統の面を写す(宗家伝来の古面、真作から模作を作る)時、必ず体調を悪くしたとか。自身でも迷信していたい奇妙だとは思いつつ、古面の作者の魂や、数百年間その面を掛けた役者たちの氣迫の存在を信じてしまうという。瘦男以外の能面を眺めてみても、中世の人の生ける者・死せる者への眼差しがうかがえるようだ。

(高塚)